例会記事

一月例会　一月二十二日（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室

一、お雇いオランダ人医師に関する新知見(2)
（レーウェン・スロイス・エイクマンについて
オランダにおけるキュンストレーキ）
H・ボイケルス
石田純郎
岡田靖雄

一、呉秀三先生編・肖哲写の絵巻

二月例会　二月二十六日（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室

一、金匱要略の底本について　小曽戸洋
一、日本における初期の小児科領域についての一考察　安達原曄子

三月例会　三月二十六日（土）
順天堂大学医学部九号館三番教室

一、近代における日中漢方医籍の流通について　真柳　誠
一、阿知波五郎先生を偲ぶ　大鳥蘭三郎
（追加演題）山田正珍の生年と歿年　長谷川弥人

四月例会　四月二十三日（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室

一、古学と古医学、特に荻生徂徠と吉益東洞に関連して
荒木ひろし
山下政三

一、脚気とビタミン炉辺話し

六月例会　六月二十五月（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室

一、愛生館の機構について　沼倉延幸
一、「一気留滞説」と「万病一毒説」について
—江戸時代古方派の病因論—　花輪壽彦
一、中川五郎治の用いた痘苗株について　添川正夫

例会講演要旨

一、「一気留滞説」と「万病毒説」について
—江戸時代古方派の病因論—

花輪壽彦

「一気留滞説」と「万病一毒説」を対立する病因論とは考えずに、むしろ古方派のめざした「医論の簡略化」と「臨床経験の重視」という歴史的な流れのなかで、両者の共通性と相違点について若干の考究を試みた。

「一気留滞説」については『病因論』（香川修庵述）と『救弊医話』（赤沢容斎）によってその内容をまとめた。「万病一毒説」については『東洞全集』に拠った。東洞の一毒説は「一気留滞説」という発生病理の中にある「思弁」を排するという形で提出されたものであると考えた。また生体内の病変に対し、「毒」という概念を与えた思想的基盤として、『荀子』の「正名思想」を引用した。東洞が「毒の所在」という固体病理学的思考に立ちな

がら、「解剖学」を治療に無益であるとして斥けた点に、「天命説」を掲げて「疾医」の道を究めようとした東洞の本領があると考えた。（なお発表の要旨は『漢方の臨床』に投稿した。）

一、中川五郎治の用いた痘苗株について

添川正夫

中川五郎治（以下五郎治と云う）は、文化九年（一八一二）ロシアから送還される際に種痘の書物を持帰り、帰国後文政七年（一八二四）、天保六年（一八三五）、天保十三年（一八四二）と北海道に痘瘡の流行した時種痘を行って痘瘡防遏に貢献した。

五郎治の持帰った種痘書についてはすでに解明済みであるが、彼が用いた痘苗についてはなお解決をみていない。演者は、五郎治の使用した痘苗に関する諸説を考証した後に愚見を陳べたい。

一、五郎治はロシアから痘苗を持帰ったか。

(1) 五郎治の「御申上荒増扣」、「持帰シ品々」の中には、彼がロシアから痘苗を持帰った記載がない。

(2) 五郎治がロシアから痘苗を持帰ったとする笠原良策、菊地武文の所説は何れも伝聞に基づく。菊地以降の諸家は菊地の説をさらに伝承したものと見受けられる。

(3) 五郎治がロシアから痘苗を持帰ったとしても、翌年送還された久蔵の例から考え、上陸後当局に没収されたと思うし、仮りに没収を免かれたとしても五郎治が国後に上陸後、江戸での取調べを終了し、福山に帰り着く迄には四ヶ月を経過しており、さらにオホツクからの船旅日数（久蔵の場合には松前迄四〇日）を考えると持帰った痘苗の活性は失われたと思われる。

二、五郎治は帰国後牛痘を発見したか。

(1) 五郎治は文政五年中川清三衛に『…牙ノ疱瘡尋得ザル時ハ人ノ疱瘡ヲ呼ニ植テ…』と書送っているが、このことは牛痘が容易に発見し難いものであることを暗示している。

(2) 勝山藩の石井宗謙、福井藩の笠原良策は牛痘牛の探索方を藩に願出たが、牛痘牛は遂に発見されなかった。

(3) 肥前の草場佩川は牛痘と思われるものを入手してシーボルトにその鑑定を依頼したが牛痘ではなかった。

(4) 石州浜田の勇次郎、豊後の牛医某が牛痘牛を発見したとそれぞれ三宅春齢、および難波抱節が紹介しているが、何れも人体接種による痘瘡予防の効果を見ておらず、従って牛痘発見例とすることができない。

(5) 五郎治が種痘を行ったとされる文政七年、天保六年、天保十三年にそれぞれ折よく牛痘が発見されたとは考えられない。

(6) 五郎治が、白鳥雄蔵を介して日野鼎哉から牛痘苗の割愛を求められてこれを果たし得なかったのは彼の使用した痘苗が牛痘由来のものでなかったためではないのか。

三、五郎治は人痘を牛に継代馴化させ、いわゆる牛化人痘苗を作出したか。

(1) 長与俊達、小林安石、井上宗端、角倉顕実らは人痘材料を牛に接種して牛化人痘苗を得ようと試みたが成功していない。（井上宗端が人痘の牛化に成功したと紹介している学者もいるが、これは三宅春齢の「補憾録附録」中第一項

記載の再帰痘苗についての記事を誤解したものと思われる。）

(2) 小山肆成は牛化人痘苗の作出に成功した事を報告しているが、難波抱節はこれを疑問としている。

(3) 明治三〇年以降人痘の牛痘化に成功した執告が見られるが、何れも牛痘苗製造所で行われており、製造所に先在していた牛痘株の迷入を否定し得ない実験である。

(4) 現在では、各国において牛化人痘株の作出は不可能とされている。

四、演者は、五郎治は人痘材料を牛に接種して生じた初代発痘を用い種痘を行ったものと考える。

(1) 五郎治は中川清三衛に『…寧ノ疱瘡尋得ザル時ハ人ノ疱瘡ヲ尋ニ植テ夫ヲ種トシテ人民ニ植ル也…』と書送っている。

(2) 熊坂秀斎は、『初メ五郎治カ種痘ヲ施スヤ天然痘ノ種子ヲ取リ之ヲ大野村ノ牛ニ施シ其痘苗ヲ採リテ人ニ施セリ…』と記している。

(3) 小林安石、玉井久右衛門、佐野董傳（トウシュン）、リヨン委員会、マーチンらは、人痘材料を牛に接種し発痘を生ずる場合のあることを報告している。

(4) 五郎治によって種痘せられた者、および五郎治の種痘法を継承した白鳥竜蔵によって種痘せられた者の発痘状態は、小林安石その他が人痘材料を牛に接種して生じた痘疱を以て種痘した場合のそれに共通する。